

稱讚二七五号

一〇五年十一月一日發行

稱讚寺
親鸞聖人報恩講のお知らせ

日時 十一月十四日（日）正午

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺
〒一二一〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番一〇号
TEL ○三一五二四二一ー〇一五
FAX ○三一五二四二一ー〇一六
H P shousanji.com



義に依るとは、義のなかに好惡・罪福・虛実を諍ふことなし、ゆゑに語はすでに義を得たり、義は語にあらざるなり。人指をもつて月を指ふ、もつてわれを示教す、指を看視して月を覗ぎるが「」とし。人語りていはん、『われ指をもつて月を指ふ、なんちをしてこれを知らしむ、なんぢなんぞ指を見て、しかうして月を覗ぎるや』と。これまたかくの「」とし。語は義の指とす、語は義にあらざるなり。これをもつてのゆゑに、語に依るべからず。

十一月一日、『サンドウイッチマン&芦田愛菜の博士ちゃん』（テレビ朝日系）は五月にも放送された「未完の世界遺産サグラダ・ファミリ『教行信証』（化身土巻）『註釈版聖典』」

なつてているようですが、「月を指せば指を認む」（月を指し示しているのに、教えられる方は指の先ばかり見て、いつこうに月をみようとしたい）という言葉です。上の表題に掲載いたしました文は、『教行信証』化身土巻に掲載された『大智度論』（龍樹菩薩作）の引用文です。

ア特別編』でした。今回も芦田愛菜さんが外尾悦郎さんにインタビューするところが放送されました。

外尾悦郎さんは、ガウディの遺志を承け継ぐ一人と言われる世界的彫刻家です。

インタビューの中で、外尾悦郎さんは、次のようにおっしゃいました。

資料のない仕事を任せられた時、誰も助けてくれないし、ガウディの意を汲み取ろうとしても分からなかつた。それは、ガウディをみようとしてたにすぎなかつた。

あるとき、ふと、ガウディを見るのではない。ガウディも僕をみてははずはない、ガウディがみている方向をみるのだと気づいたと、応えられました。

仏教の言葉が浮びました。『楞伽經』が由来にな

ったといふが、月を指せば指を認む」という言葉です。上の表題に掲載いたしました文は、『教行信証』化身土巻に掲載された『大智度論』（龍樹菩薩作）の引用文です。

「」では、「月」を真理や悟り、仏法を表わしています。「指」は教えや言葉、經典に例えられます。この教えは、教え(言葉)はあくまで真理に到達するための「手段」に過ぎず、手段に固執してしまっては本質を見失つてしまうことを示唆しています。

また、「指が月を指すとき、愚者は指をみる」とも言われ、私たちは、物事を学ぶ際や教えを請う際に、表面的な部分にばかりとらわれて、本当に大切な本質を見誤つたり見失うことが多々あることを示しています。

外尾悦郎さんも、ガウディの思いを汲み取ろうとしたとき、ガウディの頭で考えていたことをみようと、ガウディに成りきこうとしたのかかもしれません。それでは、何もわからなかつたのです。それが、一所懸命に何年もサグラダ・ファミリアの建築に関わって、漸くガウディが求めていた方向をみると、ガウディが求めていたもの、思つていたことがわかるようになつたと述べられました。

このことは、外尾悦郎さんという、世界的彫刻家だからこそ成し得たことかも知れませんね。

親鸞聖人が『教行信証』の中で、「指月の譬」を引用されたところは「聖道釈」のところでありました。

また、淨土門の教えとしても、道綽・善導の「指方立相」(淨土教で阿弥陀仏の淨土が西方にあると指し示し、その淨土の種々な相(すがた)をあきらかにする)として説かれるのです。

『仏説阿弥陀經』にもお釈迦さまが「これより西方十万億仏土を過ぎて世界あり。名づけて極樂という。その土に仏まします、阿弥陀と号す。今現にましまして法を説きたまう。」と最初から最後まで方便をもつて、阿弥陀さま・お淨土のことをいろいろ説かれます。

「方便」とは、真理に導くために、私たちが分かるように、形となつて現れてくださった仏さまのはたらきをいいます。

『正信偈』は、阿弥陀さまのお心(ご本願)とはたらきが、お釈迦さま、それを受けた龍樹菩薩←天親菩薩←彌勒大師←道綽禪師←善導大師←源信和尚←源空聖人の七高僧に脈々と受け継がれ、私・親鸞にも行き届いていることを讀えられて、最後に「唯可信斯高僧説(ただ

この高僧方が説かれる阿弥陀さまのご本願を信じるだけです」と述べられました。

「西方のお淨土」と言われ、言葉に固執してしまふのも私たちであります。かと言つて、誰も月を指すように教えてくれなければ、全くわからぬもののです。

謬か仏典の意訳かわかりませんが、「指が月を指すとき、愚者は指をみる」とも言われています。月をみているつもりで、実は指のみをみては、勘違ひしてしまう私であります。自分の受け取り方が正しいと思つてしまふのでしょうか。

『歎異抄』第二条の「念佛は、まことに淨土に生まるるたねにてやはんべらん、また地獄におきつたご本願を味わつて参りたいと思います。

『仏説阿弥陀經』にもお釈迦さまが「これより知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりとも、さら後に後悔すべからず候ふ。そのゆゑは、自余の行もばげみて仏に成るべかりける身が、念佛を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はぬ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

いろんな行をしたわけでもない私です。やつたこともないからこそ、やればできる自分だと親鸞聖人のように、比叡山で二十年間、念佛三昧等の修行をなされ他の人が仏を観たと三昧等の修行をなされ他の人が仏を観たというのに、観れなかつたとの挫折も味わわれ、自分の愚かさに気づかれた。

親鸞聖人のなさつたことの後も迎れない私ですが、親鸞聖人が味わわれた阿弥陀さまのご本願を聴いていく以外にないのかも知れません。

十月から全国各地の淨土真宗のお寺さんで親鸞聖人の報恩講がおつとまりになつていまます。十一月十一日から十六日まで、築地本願寺でもおつとまりになります。当稱讚寺は十二月十四日です。そして翌年一月九日～十六日は京都本願寺でご正忌報恩講がおつとまりになります。

親鸞聖人を雲の上の存在と崇めるだけではなく、親鸞聖人が求められ、私に伝えてくださつたご本願を味わつて参りたいと思います。

淨土とは念佛者の願いによりて見出されたものに他ならぬからである。したがつて淨土は念佛者のところにたがうことではなく、その願いに応じて必ず往生することができる。それは疑うまじきことである。

かかるにそのことを疑うのは、阿弥陀の光が念佛者を摄取して捨てられないことを信じないからであろう。淨土往生というも摄取の光益の他ないからである。かかるにその摄取不捨の光を感知するものは念佛である。しかしてその摄取不捨の光こそは現前の阿弥陀仏にほかならない。しかれば「弥陀の摄と不摄とを論ずる」よりは、念佛のところの願いをあきらかにすることが手ぢかな道といわねばならないのである。念佛のところがもっぱら淨土へと廻向しているならば往生は疑いなきことである。その専心廻向が淨土からの招喚をも感じ、摄取不捨の光をも受容するのである。

このに専心廻向の南無と、摄取不捨の阿弥陀仏との感應が成就する。これによりて念佛は帰依を求むるところであり、帰依のところそのものでありそのままに帰依を得たるところとなるのである。これすなわち念佛における阿弥陀の徳に依るのである。したがつて「淨土対面してあひたがは」ざることも、摄取不捨の力である。これはまことに不思議の眞実である。しがるにこの眞実は信じがたい。なぜであるか。奇怪なことは信じても眞実のことを受け入れない。それが凡夫のところである。眞理

ならば承認するが眞実なるものを受容しない。それが知識人のところである。修行の功を積んで成就することは、信じられるが、称名念佛に功德具足するということは領かれない。それが道徳を頼むもののところである。こうして念佛は行われず、眞実は信じられないのである。

このには念佛は易行であるから信じられないという心理があるようである。されど念佛は易行なればこそ、ただ信ずるより他ないものである。信じがたいとは信ずるより他ないことであるからである。眞実とは疑うまじきことである。かかるにわれらはなにゆえにそれを疑うのであるうか。「恨むらくは衆生の疑ふまじきを疑ふ」とことである。この悲しみ歎きの深さにおいて、いまさら「よくよく煩惱の興盛に」とぞ懺悔せずにおれないことである。

三

第二偈は「あるひはいはく」に始まる。これは往生人のところになつての言葉である。善導ひとりの感情ではあるまいという表示である。それだけ歌嘆の息は深く長い。しかしてその重点を後半の「弥陀弘誓の力をかふらずば、いづれの時、いづれの劫にか娑婆をいでんに集中されているようであるが、願いは特に「娑婆を出づることにあるのである。したがつて、この偈の時、いづれの劫にか娑婆をいでんに集中しての意を領解するためには、何よりも娑婆を出することの意義を明らかにせねばならない。

の衆生は内に種々の煩惱があり、外には風雨寒暑などがあつて、苦惱に堪え忍ばねばならないから忍土というのである。しかるに内なる煩惱とは生の本能による愛と憎しみとにによるものであり、外からの情勢に堪え忍ばねば乱である。したがつて、この内なる感情と外なる情勢とが調整されないかぎりは、苦惱を免れえないので人間の運命なのであろう。

その内なる感情を調えるものが道徳であり、その外なる情勢を調えるものは知識である。されどその知識にも限界があつて、真に安樂であることができないのみならず、かえって苦惱を深めることにさえなるのである。しかれば人間の一生「いづれの時」か、この娑婆を出すことができよう。世界は「いづれの劫(時代)」になつても、眞の平和を期待することはできないう。こうして人間は永遠に苦惱を離れることができぬのであろうか。

このに「弥陀弘誓の力」がある。その弘誓とは人間にかけられたる無限の大悲である。その無限の大悲によりて、淨土の願いはあらわれる。そこは苦惱のない所と説かれてある。しかれば淨土とは内なる愛憎の煩惱なく外なる順逆の障がないのないところであるにちがいはない。しかしそれはあくまでも無限大悲の世界であるから、われらはその世界の帰依のところとしてのみ、真に苦惱に耐え得るのであろう。苦惱が人間の免れえない運命であるとすれば、そこに要求されるものはそれに耐え得る力で

ある。しかれば「弥陀、弘誓の力をかぶらず」ということは、来生の安樂を期待するよろこびではあるが、それはそのままに、翻つて人間生活の罪障を思い知らしめるものである。こうしてここにも嘆仏と懺悔との交流が流れているのである。

しかれば「いまより仏果に至るまで、長劫に仏をほめ、慈恩に報ぜん」ということも、この弥陀大悲のありがたさを思う至情にほかならぬのであろう。」の語句には婆娑を出ずることと、仏果に至ることとは別であるように思わしめるものがある。それは「往生は易く成仏は難し」という思想によるものであろう。されど淨土が本願成就の場であるかぎり、往生と成仏とは別なものではない。しかれば難い成仏も易き往生によりて果遂せしめるところにこそ弥陀弘誓の力があるのであろう。されどその仏の道は無限である。覚(きとり)をひらけば覚のはじめもなければ覚の終りもない。したがつて仏であることと仏となることとの別もないことが身証されるのであろう。」に「今より仏果に至るまで長劫に仏をほめ慈恩を報ぜん」という尽きない感情があるのである。

四

第三の偈は特に釈迦の教恩を讃えるものである。善導にあつては弥陀の本願といつても、釈迦の教えによりてのみ信受せられたのであつた。それだけ釈迦の教恩を感じざるものが深かつた。

たのである。それで『般舟讚』の序説も「まさに大いに懺悔すべし、釈迦如來はこれ慈悲の父母なり」ということから始められた。しかして讚文にそのところが繰り返されている。しかればこの第三偈は特にその感懷を表現せるものといてよいのであろう。「いかんが今日、宝國(淨土)に至ることを期せん。まことに、」れ婆娑(淨土)に至ることを期せん。まことに、本師の力なり」と歌い、それを折返して「もし本師知識の勧めにあらずば、弥陀の淨土いかんしていらん」と嘆じてある。ここに音韻の妙趣もあるのではないであろうか。

かかるに釈迦の慈恩といつても、善導にあっては『観經』の教説の他にはない。それは『観經』において自身の道を見出されたからである。ということは『観經』の対機である韋提希に自身を思い合わされたからであろう。したがつて弥陀の弘誓でなくては救われないものは、五障の女人韋提希であつたといわねばならない。言い換えれば、釈迦その人の智慧ではどうすることができないものが煩惱業苦に沈めるものであるということである。弥陀はその聖弟子たちに対しては四諦・八聖道を説き、それによりて生死を解脱せしめる、ことができた。したがつて釈迦はその弟子たちの指導者であることもできたのである。されど煩惱の生活を離れることのできないものに、涅槃の光を与うることは釈迦といえどもできなかつたのであろうか。そこに開かれたものが、弥陀の本願であり、念佛の法である。『観經』はそのことを教う

たのである。そこで、その教意を推せば、弥陀の本願とは釈迦の大悲を表現せるものといってよいのであろう。釈迦は自身の智慧ではどうする」ともできない韋提希に対する大悲を弥陀の本願として説きあらわせるのである、という意味において釈迦の願いであった。そこに無限の自願として説きあらわせるのである。自覺の無限性があるのである。

したがつて、ここに感ぜられるものは、釈迦の教説と弥陀の本願とは表裏となつていることである。真にそれなればこそ釈迦は本師とも覺があるのである。自覺の無限性があるのである。

いわれ、善知識とも仰がれるのであろう。こうして「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず」と伝承されたのであつた。

その釈迦の説教の眞実は善導の御釈にあらわれ、さらに「法然のおほせ」となり「親鸞がまうすむね」となりて伝えられた。そこに伝統の歴史があるのである。その伝統において、善導・法然・親鸞の三師がそれぞれ如何に求道し信解し、行証し聞思せられたかは計りしる、とのできぬことであろう。されどそのすべては本師釈迦の恩徳に帰せられることである。したがつて釈迦の恩徳に帰せられることである。したがつて仏教の歴史を貫いて感知せられるものも、弥陀の本願の他にはない。こうして、われらは永遠真実なる法と、人間の精神生活との対応を、釈迦・弥陀の名において身証せしめられてゐるのである。

浄土真宗のビハーラケアを考える

六大臣の諸思想と仏教の縁起思想

1 王舍城悲劇の根底にある諸思想

一六師外道

人間は、自らが生きている時代や地域のバラダイム、すなわち、その時代に通用している概念的な思考方法に影響されている。たとえば、

21世紀における諸外国が、資本主義というものの見方に立って現実を解釈するように、この阿闍世や釈尊の時代にも、六師外道というものの見方が流行していた。六師外道とは、釈尊とほぼ同時代の紀元前5ー6世紀頃に、ガ

ンジス河中流域のマガダ国を中心に行き、六人の思想家であり、仏教の思想と異なるので外道と呼ばれる。阿闍世の病気を心配した六人の大臣は、六師外道の思想を象徴したものである。また、六師外道の諸思想とは異なる思想として、釈尊は、縁起思想を阿闍世に説いていた。したがって、王舍城悲劇の背景にある「ものの見方」を理解するために、六師外道の思想をふりかえり、縁起思想の独自性がどこにあるのかを明らかにしておきたいと思う。

まず、六人の大臣の思想をもう一度ふりかえてみたい。

(1)大臣月称 がつしゅう
プーラナ・カッサバ
(Purana Kassapa)

〈道徳否定論〉
善や悪の行いに対しても、何の果報ももたらさないという考え方である。因果を否定し、道徳を否定し、自己の行為に対する責任をとらないものである。この立場は、因果を撥無(はつむ)する(はねつける)空見であり、快楽主義に近い。

(2)大臣藏徳 まかりくしやりし
マッカリ・ゴーサー(マ)
(Makkali Gosala)

〈王法至上主義・自然決定論〉
この世では王が法律であるから、王がとった行動に罪はない。決定論者とは、意志に基づく行為を否定し、すべては自然に決まっているという見方である。人はまた人として生まれる」とが決まっており人の苦楽は、誕生した後に自然に受ける」とが決定している。したがって殺生をしても、その罪の責任を負うことはない。この立場は、邪命外道ともよばれた。

(4)大臣悉知義 じつかい
阿耆多翅舍欽婆羅
アジタ・ケーサカンバラ
(Ajita Kesakambala)

〈唯物論・無因無縁説・快楽論〉
唯物論とは、この世界には地・水・火・風の四元素のみが実在しているだけであり、善因善果、悪因悪果という因縁を否定し、快楽を求める。この立場は、順世外道ともよばれる。

(5)大臣吉徳 からくだかせんえん
パクダ・カッチヤーヤナ
(Pakudha Kaccyana)

〈無因論的感覚論・七要素論〉
無因論的感覚論とは、因を認めず、人間は地・水・火・風・苦・樂・生命の七要素から成っていると考え方である。それらの七要素は不变で、人は作られたものでもなく、他を作り出すものでもない。たとえ人を殺しても、剣はその七要素の隙間を通るだけであるので、その罪はない。

(3)大臣実徳 じゆじゆ
刪闍耶毘羅胝子
サンジャヤ・ペーラシティブッダ
(Sanjaya Belatthiputta)

〈懷疑論・不可知論〉

懷疑論者とは、確定的な回答を避け、どちらともいえないという不明瞭な議論を開いたので、不可知論ともよばれる。人は前世からの果報をあとで受け、人間の意志によって自由に行為しているわけではないから、この世で悪を犯しても、その責任を受けないとよいえない。

(6) 大臣無所畏 尼乾陀若提子。
「ガンダ・ナータブッタ
(Nigantha Nataputta)

〈自己制御説・戒律重視・ジャイナ教開祖〉
ジャイナ教では、動植物をはじめとするあらゆる存在に靈魂が宿ると信じ、その生命を守るために、不殺生、不妄語、不偷盜、不邪淫、無所有などの戒律を厳守する。仏教は生きとし生けるものの尊嚴を平等に尊重する点は、ジャイナ教と共通するが、靈魂を固定的な実体として認めるジャイナ教の見方は、仏教の無我思想にはない。ジャイナ教では、世間の虚飾を捨てて、断食や苦行に専念して、世俗の業の影響を取り除き、心の汚れを浄化する」とをめざす。この立場は、裸形外道ともよばれる。

なお親鸞は、この大臣無所畏と尼乾陀若提子という名前だけを信巻に引用し、無所畏の考え方を示している『涅槃經』の経文を引用していよいよ、

これらの六師外道の思想は、当時のインドにおける一般的な思考方法を理解するためにも、仏教の縁起思想との違いを理解するうえでも必要である。

また注目すべきことは、親鸞が、この六師外道を象徴する六人の大臣のアドバイスを削除せずに、ほぼそのまま信巻に引用して紹介していることである。おそらく親鸞は、縁起思想とは異なる諸思想が存在する」とを、こ

の世界の現実の姿としてありのままに知つておく必要があると感じたからであろう。その意味では、これらの六師の思想は、単なる過去の思想、パラダイムとして軽視せずに、時代や地域を越えた現代社会においてもなお存在している思想として見直していくことができるだろう。

2 縁起思想の独創性

一 諸思想との比較

そこで、この六師外道の思考方法の特徴をおよそ四つの思想に整理して、それらの「ものの見方」とは異なる、仏教の縁起思想の独自性を明らかにしておきたいと思う。

(1) 因尊祐説(いんそんゆうせつ)

第一に、宇宙がたつた一つの原因によって支配されているという見方(因尊祐説)を、仏教はとらない。因尊祐説とは、苦・樂・不苦不樂を感受する一切の原因是、自在神が作ったものであるといふ主張である。たとえば、創造主であり唯一である神のような存在にすべての現象を収斂させるような立場を仏教はとらない。仏教は一人ひとりの意志と行為を尊重しない。仏教は一人ひとりの意志と行為を尊重し、行為の結果や原因などを自己以外のものに求めない。あらゆる存在は因となり縁となつて相互に関係しあつているからである。

(2) 習作因説(しゅくさいんせつ)

第一に、人間がこの世で経験するなどのよ

こともすべて運命であるという見方(宿作因説・因宿命説)を仏教はとらない。宿作因説・因宿命説とは、苦・樂・不苦不樂を感受する一切の原因是、外在的な宿命、前世に作られたものであるという主張である。因なくして始めの存在が始め(因)において結果が定まっているという宿命論のような見方である。もしも、すべてが運命によって定まっているならば、この世において善い行いをするのも、悪い行いをするのも、すべて運命であり、幸・不幸も生まれながらに運命によって決まっていて、運命の他に何ものも存在しないことになる。運命論は、人びとに「これはしなければならないとか、これはしてはならない」という願いも努力もなくなり、世の中の協調や進歩や反省もなくなることになる。

(3) 無因果説・無因無縁説

第三には、因も縁もないとする見方(無因果説・無因無縁説)を仏教はとらない。無因果説・無因無縁説とは、苦・樂・不苦不樂を感受する一切には、原因も縁もなく、起つたものであるといふ主張である。原因と結果との連續性(因果関係)を否定する見方や、原因のなかに結果が存在しないという見方は、善因善果、悪因悪果を認めない思想となり、たとえば、道徳を否定する立場や、呪術などで人間の運命を左右する立場を認める」とになる。

(4)唯物論説 物質還元論

第四には、すべてのものを物質的変化に還元して精神的な価値を認めない見方(唯物論・物質要素論)を仏教はとらない。唯物論とは、もとの「」との根源は素材としての物質のみとし、観念や精神の存在を認めない思想である。「」の唯物論的な存在理解だけでは、人間の精神的な営みである苦しみを解決する「」ことはできない。「」この指摘は、物質還元主義による人間理解でもあてはまる。物質還元主義とは、心の悩みや罪を自分のこととして引き受けず、すべて物質の現象作用として片付けようとする見方である。「」この唯物論的な見方は、善い努力や行為が善い結果をもたらし、自他を害する悪い行為が悪い結果をもたらすといった、世界を連続的に見ようとする価値観がない。その結果、一人ひとりの生きる力を育てられず、人間社会の倫理も成立しなくなる。

「」これら四つの主張は、人の行為や努力を否定するため、仏教の演技思想とは異なるとしたのである。

(5)縁起説

それでは縁起の真理の独創性は何であるか。縁起の真理は、すべてのものは因と縁によってたえず変化していく思想である。人間の願いと努力によつて、自他ともに苦しみから安らぎに導くことをめざす。縁起にもとづく生き方は、人間一人ひとりの自由と精励を尊重し、あらゆるものに対する慈悲や感謝の自覚

を育むのである。「」の縁起という思想は、仏教独自の思想であり、西欧思想には見当たらぬ。

他力本願

「他力本願」という言葉は、浄土真宗においてみ教えの根幹に関わる最も重要な言葉です。

「他力」とは、自然や社会の恩恵の「」ことではなく、もちろん他力の力をあてにする「」ことでもあります。

また、世間一般でいう、人間関係のうえでの自らの力や、他の力という意味でもあります。

「他力」とは、そのいずれをも超えた、広大無辺な阿弥陀如来の力を表す言葉です。

「本願」とは、私たちの欲望を満たすような願いをいうのではありません。阿弥陀如来の根

本の願いとして「あらゆる人びとに、南無阿弥陀仏を信じさせ、称えさせて、浄土往生せしめよう」と誓われた願いのことです。

この本願のとおりに私たちを浄土往生させ、仏に成らしめようとするはたらきを「本願力」

といい、「他力」といいます。

私たち念佛者は、「」のような如來の本願のはたらきによる救いを、「他力本願」という言葉で聞き喜んできたのです。「」にはじめて、自らの本当の姿に気づかれ、いまのいのちの尊さと意義が明らかに知らされるのであり、人生を力強く生き抜いていくことができます。

※「相依」とは、相互に依存する「」と、「相成」とは、互いに相手を完成させる「」。「」のものが相合して完全なものになることを意味する。

※「相資」とは、相たすける関係、「相待」とは相互依存、互いに相よつて存立する「」ことを意味する。

※「相資」とは、相たすける関係、「相待」とは相互依存、互いに相よつて存立する「」ことを意味する。

※どうして、他力本願を味わうことが、自らの本当の姿に気づき、「」のいのちの尊さと意義が明らかに知り、力強く生きていける「」となるのか、聞き尋ねて参り、伝えていただらうと思います。

(中村元著『仏教大辞典』より)